



本田弘之・岩田一成・倉林秀男『街の公共サインを点検する―外国人にはどう見えるか』大修館書店、2017年

日本文化学科1年 「さんの読書レポート

外国人にとって日本語は、会話程度であれば習得にはそれほど時間を要さないが、「読む」ことはとても難しい。だが、私たちが日常生活の中で情報を受け取るシーンでは、標識・看板・ポスター・貼り紙といった文字を主とした視覚的な情報、つまり「サイン」が行動する際の頼りとなっている。日本語を母語としない人たちにとって街中のサインは、買い物や移動ではもちろん、災害時や緊急時の行動の大切な情報源となるだろう。そこで、外国人に日本での日々を安全に、また快適に過ごしてもらうためには、外国人にもわかりやすいサイン掲示をする必要がある。

本書では、外国人でも容易に理解ができるサインとはどのようなものか、また、街で見るサインは的確に情報伝達の役割を果たしているのかを点検し、日本のサインが抱える問題点の指摘・改善策の提案を行っている。

ここまでもたびたび登場している「サイン」の中の「公共サイン」に関しては、様々な自治体・団体により分類のガイドラインが制定されているが、その中でも最も影響力の強い国土交通省が制定する、①誘導サイン類、②位置サイン類、③規制サイン類、④案内サイン類という4つの分類にもとづき各章で論じられている。また、一見公共サインのように見えるが、実際は①～④のいずれにも当てはまらないようなものにも言及がされている。

まず①の誘導サイン類は、施設等の方向を指示するのに必要なサインと定義されている。本書では、それらのサインについて空港や鉄道駅といった公共交通機関の施設を軸に議論が展開されている。比較対象のヨーロッパと比べて、日本はサイン掲示のルールが定まっていないため、ローカルルールの出現などにより公共サインの機能である情報の伝達に支障をきたしている。筆者たちはこれらのルールを整備することに加え、グローバル化に伴う言語障壁を乗り越える方法としてピクトグラムの採用を挙げている。防災のためのサインについても整備途中のものが多いため、避難場所を表すピクトグラムや用語の統一も行っていくべきだとしている。

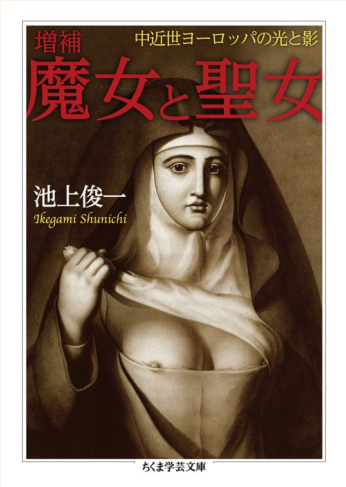
施設等の位置を告知するのに必要なサインである②の位置

サイン類について、街中でよく見かけるものには英語訳とローマ字の読みがついていることが多いが、実は在住・訪日外国人ともに英語話者は少なく、日本語ができる人が1番多い。さらに在住と訪日では必要な情報の量や内容に大幅な差がある。そのため筆者たちは、在住外国人には英語やローマ字だけでなく、簡単な「やさしい日本語」を使用するという選択肢を、訪日外国人向けにはスマートサインやピクトグラムなどの導入という選択肢の提案を行っている。

③の規制サイン類は、利用者の行動を規制するのに必要なサインである。特に注意喚起のサインは現在、街中にあふれかえっている。しかし注意喚起は数が少ない時、つまり目立っている時にその効果を発揮するため、これが多く存在していると、注意喚起としての役割は薄れ、重要なサインが見落とされてしまう可能性が高くなっている。そのため、サインの目的を1つに絞り、文章の工夫やイラスト・写真の活用をすることによって不必要な注意喚起文を削減することが重要であるとされている。

最後に④の案内サインは乗降条件や位置関係等を案内するのに必要なサインとされている。本書では、これからの公共サインの方向性として、多言語化を進めるのではなくピクトグラムを積極的に利用していくべきだと繰り返し主張されてきた。実際、ピクトグラムが少しずつ統一されてきたことにより、案内サインによる場所の探しやすさは改善されてきた。しかし、案内サインをさらに2つに分類した際的一方である「取り扱い説明」(トリセツ)は、その使用が困難な状況も依然として多い。操作方法が複雑になると文字で説明するための多言語化が必要となるが、スペースや経済性、手間といった様々な問題が障害となってしまうからだ。それらの問題を解決する最善の方法としては、タッチパネル式「デジタルサイネージ」の導入が挙げられるのである。これを使えば、多言語を用いた「トリセツ」の表示が可能となり、多くの訪日観光客に楽しい旅を過ごしてもらえるだろう。また、分類のもう一方である「案内マップ」は、従来型の案内サインでは役割が不十分なため、大規模なショッピングモールなどでも使える新たなタイプの案内マップをデザイン、開発することが必要となる。そして、近い未来、スマートフォンやスマートグラスで使われる新しいサインの可能性も示唆されている。

本書は、誘導・位置・規制・案内の4つのサイン分類ごとに話が展開されており、「外国人にも伝わるサイン」とはどのようなものかを日本のサインの問題点などを交えつつ考察・紹介している好著である。また、各章において国内外問わず実際の街中のサインの写真が掲載されているため、取り上げられている事例への解像度をより上げることができ、さらに関心を持った読者は、文献のみならず自分で直接サインを探しに行くこともできる。外国人に対する公共サイン、特にピクトグラムを使用した災害時の対応やその後の避難所での情報提供のシーンでどのようなピクトグラムが外国人への情報伝達に有効なのかを、本書を通じて考えていただけるはずである。



池上俊一『増補 魔女と聖女―ヨーロッパ中・近世の女たち』ちくま学芸文庫、2015年

日本文化学科1年 Kさんの読書レポート

私が本書を選んだ理由は、宗教という人間の精神に深く関わるテーマと、魔女や聖女にまつわる、いうなれば“オカルト的”とも言える不思議な世界観に、以前から興味を持っていたからである。古代や中世の人々がどのように「神」や「悪魔」を捉え、現実を生きていたのか、宗教的な意味での信仰だけでなく、人間の想像力や恐怖、希望といった感情はどのようににはたらいっていたのかに関心を持った。本書は、中世ヨーロッパにおける「魔女」と「聖女」という、正反対のような存在を軸に、宗教、ジェンダー、権力、身体観といった様々な視点から、当時の人々の世界観を描き出している。単なる魔女狩りや聖人伝の紹介にとどまらず、「なぜ女性が神聖にも邪悪にもなりえたのか」、「その背後にはどのような社会構造があったのか」といった問いに迫る本書は、知的な刺激に満ちた一冊であった。

本レポートでは、魔女と聖女という対照的な存在を通して見えてくる中世社会の複雑さと、それが現代にも通じる問題を含んでいることについて考察していきたい。

本書の最も興味深い視点は、魔女と聖女という一見対極にある存在が、実は中世ヨーロッパにおける宗教的・社会的枠組みの中で、共通の構造によって定義されていたという点である。魔女は悪魔と契約し、超自然的な力で悪行をはたらく「異端者」として恐れられ、火刑に処された。聖女は神と同じ、奇跡を起こす「神聖な女性」として崇敬された。しかし、どちらも「普通ではない女性」であり、常人の理解を超えた力を持つ存在として、人々の想像力を強くかき立てた。魔女も聖女も、ともに「神の意志」や「悪魔の力」といった超越的な存在と関わっている点では共通している。中世においては、病気の治癒、予言、幻視、浮遊、無腐敗死体など、人知を超えた現象が「聖なる奇跡」とされる一方で、似たような現象が「悪魔の仕業」と見なされることもあった。その境界は、彼女たち本人の意図や性格によって決まるのではない。むしろ社会や宗教権力がそれをどう評価したかで決定されていた。つ

まり、聖女と魔女を分けるのは、「力の有無」ではなく「意味づけ」であり、それを決めるのは教会やその他の共同体の判断だったのである。

特に印象的だったのは、女性の身体や性的な特質が「聖なるもの」と「穢れ」の両義的な意味を持っていたという点である。女性は生理や出産を通じて血と関わり、それが神秘と不浄の両方を象徴する存在とされていた。修道女たちはその身体性を抑圧し、禁欲的な生活を送ることで神に近づこうとしたが、同時に彼女たちの身体は幻視や神秘体験の媒体として注目された。逆に、性的に逸脱したとされる女性や、薬草を用いた治療を行う女性たちは、「異端」として魔女に分類され、迫害された。こうした女性に対する視線は、ただの迷信ではなく、当時の社会秩序やジェンダー規範の維持に深く関係していた。男性中心の教会制度の中で、女性が「神と直接つながる存在」として尊敬されたり、「悪魔と通じる危険な存在」として恐れられたりすることは、支配構造そのものを揺るがす可能性が存在した。そのため、聖女は厳しい審査や試練を経て「正統化」され、魔女は裁判と処刑を通じて「排除」された。池上はこの過程を、宗教的な正当化と政治的な管理が交わると捉え、魔女と聖女の物語がいかに関「社会が女性をどう位置づけるか」という問いに直結しているかを浮かび上がらせる。

私が強く感じたのは、「聖なるもの」と「邪悪なもの」が、紙一重のところに存在するというものの薄気味悪さだ。奇跡を起こす力が称賛される一方で、それが少しでも周りの理解や期待から外れると、「悪の力」として反転してしまう。つまり、同じ現象が「神のしるし」になることもあれば、「悪魔の仕業」とされることもある。その不安定さは、中世の人々の信仰の強さと同時に、信仰が強いがゆえの危険性を象徴しているように思えた。このような「意味づけ」は、決して過去の話ではない。現代においても、女性のふるまいや信念が社会的規範から外れると、過度に称賛されたり、あるいは逆に厳しく批判されたりする場面は少なくない。魔女や聖女に映し出された“逸脱への恐れ”や“聖性への憧れ”は、私たちの中にもいまだ残っているのではないか。

本書を通して、魔女と聖女という対照的な存在が、中世ヨーロッパ社会の宗教観や女性観、さらには権力構造と近く結びついていたことを学ぶことができた。どちらも非現実的な力を持つ存在として共通しながら、その評価が正反対となるのは、社会や宗教の都合による意味づけの違いにすぎない。こうした視点は、現代におけるジェンダーや宗教、権力のあり方を見直す手がかりにもなると考える。ヨーロッパに限らず、日本などほかの文化圏における「聖なる女性」と「異端の女性」のあり方についての比較、社会と信仰の関係については、今後の課題としたい。



中村桃子『女ことばと日本語』岩波新書、2012年

日本文化学科2年 Kさんの読書レポート

はじめに

世界には、“女らしさ”や“男らしさ”という概念のもと、それらを求めるジェンダー的な考えが多く存在している。日本でも、女性に対して丁寧な所作、丁寧な仕草などが求められる場面が多く見受けられる。それは言語の観点からしても同様であり、日本には女性らしい丁寧な言葉遣い、いわゆる「女ことば」が存在し、女性はこのような女ことばを話すべきだと考えられてきた。このような歴史を踏まえ、なぜ「丁寧」と「女ことば」はここまで深く結びついているのか、という疑問が生まれた。そこで、言語とジェンダーを専門に研究を行っている中村桃子の著書である『女ことばと日本語』を読み解いていきたい。本書では、女性がつかうべき女らしい言葉とされる女ことばの歴史が取り上げられ、その背景にある近世から現代までの日本社会の価値や規範、庶民の憧れや国家イデオロギーが解き明かされている。各時代のさまざまな言説と、言語学やジェンダー研究の知見から、「女ことば」の魅力と不思議を知ることができる。

要約

日本では女ことばの成立について、長い間女性が男性とは違う女らしい言葉を使い続けたため、それが女ことばになったという理解がなされている。しかし、この考えにはいくつかの問題点、それに付随する問いが生まれる。

1点目は、千差万別である女性の言葉遣いがどのようにして、1つの女ことばにまとまったのかという問いだ。答えになるのは、女房詞の存在である。当初の女房詞は社会階級に結びつくものだった。しかし、次第に「女房詞は女が話すことば」という言説が流れ始めると、取捨選択された女房詞をまとめた女訓書が出され、規範として女性の言語行為を支配するようになった。こうして、女ことばはひとつにまとまっていった。

2点目は、「女性はこのように話すべきだ」という女ことばの規範はどのようにして生まれたのかという問いだ。女訓書のような当時のマナー本では、女性は話すことすら禁止されており、支配されるべき対象とされていた。その後、「つつしみのある女は喋らない」という言説が常識として流布するようになった。このように、女訓書による女性の言葉遣いの規定は、形を変えつつ鎌

倉時代から明治期、そして現在にまで続いている。

3点目は、メディアはなぜ女ことばの知識を発信してきたのかという問いだ。この問いの背景には、政治・性・メディアにかかわる社会変化がある。当時、女学生はセクシュアリティ化される一方で、良妻賢母としての規範も求められたため、理想が詰まった実態のないアイコンとなっていた。その為、男性や読者などに望まれる形の女学生の姿、女ことばをメディアは言説として伝えていた。

4点目は、女言葉に与えられた伝統的価値についての問いだ。日本は戦時中、国民を統合する必要があった。そこで、女ことばを天皇制と結びつけ、日本の優位性を示すことで女ことばに伝統的な価値を与えた。そして、女ことばこそが日本の誇りであるという言説のもと、女性国民に対し、女ことばの伝統を守ることが期待された。

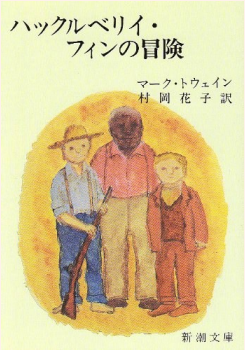
これらの問いは、女性が自然に話している言葉がそのまま女ことばになったという考えでは解決に至らない。女ことばが持つ規範・知識・価値などの体系であるイデオロギーを成立させた言説こそが、女ことばを作り上げたといえる。

考察

本書を読み、女ことばは女性が話し始めたのではなく、規範によって制限された話し方や理想とされた話し方を女性が話すようになった結果、それが女ことばとしてまとめられたことが分かった。つまり、もともと女性の話し方と丁寧さは結びついていなかったということになる。そこで、女性の話し方と丁寧さが結びついた背景を考えると浮かび上がってくるのは、「女訓書」の存在である。現在の女性の話し方のもとになっているのは、女訓書の中で求められた「つつしみのある話し方」である。この際のつつしみとは、「多くを語らないこと」を指す。現在も、この規範を引き継いでいる多くを語らない女性の話し方は丁寧とされている。そこで、現在丁寧とされているのは「女性の話し方」ではなく、「多くを語らない話し方」であるというのが、本質であると私は考える。そのため、男性であっても多くを語らないつつしみのある話し方をする人は、丁寧とされるのである。では、なぜ女性と多くを語らない話し方は深く結びついているのか。それは、「多くを語らない女性の話し方」が、伝統として受け継がれているからである。女性の間で、丁寧な話し方が長い間受け継がれていることから、結果的に、女性にのみ丁寧さが結びついた。これが、「女ことば」と「丁寧」が結びついた理由だと考える。

おわりに

本書から、女ことばという枠を超えて、当時の時代背景、時代に伴う社会情勢の変化、世界情勢についてなど様々な観点から新しい知見を得ることができた。それは、言語を学び、研究する際には、言語のみに注目するのではなく広い視点を持つ必要があることを示している。私は、卒業研究で言語分野を対象にしたいと考えているので、本書で得た知見を活かし、広い視野を持つことを意識して学んでいきたい。



マーク・トウェイン、村岡花子訳『ハックルベリイ・フィンの冒険』新潮文庫、1959年

日本文化学科2年 Tさんの読書レポート

はじめに

著者のトウェインは、代表作に『トム・ソーヤーの冒険』などがあげられる作家である。筆者は文学分野の専攻を検討しており、この作品から文学で書かれた当時の文化、考え方に触れ、学ぶことができると考えこの本を読んだ。

要約

ハックルベリイ・フィン(ハック)は、トム・ソーヤーとの冒険で大金を得てある家の養子となる。だが、家族との生活に馴染めずトムと夜中に家を抜け出し遊んでいた。また、神に祈っても他人のためになるだけで、少しも自分のためにならないから、と祈らなかった。冬のある日、ハックは自分が見つけた足跡が失踪していた父親のもと気づいた。お金があると父親にすべて取られると考えると、自身のお金を判事にすべて預ける。その晩、父親がハックを訪ねてきてハックがもっていた少しのお金を奪い、父親は酒を飲み、大暴れし監獄へ入れられる。それを見た判事たちは父親とハックを引き離そうとする。だが、うまくいかず釈放された父親はハックと森の奥の小屋で暮らすようになる。

ハックは森の暮らしに慣れたが、父親の暴力がひどくなったため、父親から逃げ出すことにする。自分が殺されてしまい、金品も奪われたことにして、見つけたカヌーに乗りジャクソン島へ向かった。

ハックが島で過ごしていると、ミス・ワトソンの家にいた黒人のジムと会う。ジムは自分が遠くに売られると考え、家を逃げ出していた。二人はその後、洞穴で暮らす。ハックは、女の服を着て町の様子を伺いに行った。町に住んで日が浅いお婆さんは、ジャクソン島にジムが逃げていると考えていた。洞穴に戻ったハックはジムと共に島を抜け出す。

川を下っているうちに、とある二人を助け共に旅をする。その二人は町でインチキを行い、お金を稼いだ。また違う町では、亡くなった人の兄弟と偽りお金を稼ごうとした。ハックは騙されている娘たちを可哀想に思い、お金を返してこの悪党二人から逃げようとする。お金を返すことは成功したが、悪党からは逃げられなかった。

悪党たちは別の町で人を騙そうとしたが失敗し捕まった。ハックは逃げられたが、ジムは逃亡奴隷として捕まってしまう。ハックは共に旅をしてきたジムを助けるために、地獄に落ちてもいいと決意した。ジムを捕らえている家に、嘘をついて入る。それはトムのお婆さんの家だった。その家の近くに来ていたトムにジムを助けることを話し、協力してもらう。二人はジムの場所を突き止めて逃がすが、結局捕らえられてしまう。またボリーお婆さんが来たことで、二人が嘘をついていたことがばれる。その後、実はジムはミス・ワトソンの遺書ですでに自由になっていたことを知った。

考察

私は、この小説は主人公ハックの考えの変化を描いていると解釈した。先行研究も用いながら、その理由を説明する。

一つ目に、ハックの良心の変化である。ハックは始め、自分のためにならないことは意味がないと考えている。田染によれば「ダグラス夫人に引き取られる以前は、自分で寝起きする場所を決め、自分で食べるものを探し、誰にも依存せず抜け目なく生きてきたため損得勘定でしか物事を考えられないのである。」(21頁)。だが、旅のなかでハックは、自身にとって得にならない行動をする。それは悪党二人が騙した少女に対して、お金を返そうとすることや、泣いていた彼女に真実を話してしまうことである。ハックのこの行動は、悪党二人に気づかれれば攻撃されるため、損にしかならないだろう。このことから、旅をしていくことで、ハックは自身の損得のみで動くという考えを改めていると解釈できるのではないだろうか。

二つ目に、黒人であるジムに対する考え方についての変化である。ハックは当初黒人に対し、白人よりも下の存在であると考えている。鈴木は次のように述べている。

トムは、（省略）奴隷であるジムを木に縛り付けたいというが、それに対してハックは反対するはするものの、それはトムがそのようないたずらをすれば自分が家にいないことがばれてしまうからというものであり、決してトムのいたずらを非難しているからではない。この時点で、ハックの黒人に対する感情は、トムのそれと、あまり変わらないのである。(41頁)

つまり、大人であるにも関わらず、ジムに対していたずらをしており、からかってもよい存在と捉えている。しかし、ジムと旅をしてゆくにあたって、彼にいたずらをした後怒られ、謝りに行っている。このことから、黒人に関する考え方を大きく変化させているといえるだろう。さらにジムが逃亡奴隷として捕らえられた時も、田染によれば「ハックはジムを人間の尊厳を持った者と見なして、ジムを助けるということとを『奴隷を助ける』のではなく、『友を助ける』と考え始める。」(30頁)。奴隷であって何をしても良いと考えていたハックが、ジムに謝り、さらに黒人は奴隷であることが一般的な当時のアメリカ社会において、ジムを友人と捉えるようになっているのである。

おわりに

今回この小説を読み、ハックの一人称視点で話が進むことで、この時代の白人の子供の考えや、黒人への対応に接することができた。また参考文献に挙げた論文には、作者トウェインの黒人に対する偏見が小説の書き方に反映されているとあったため、トウェインが書いた他の作品にも触れて当時の黒人差別、そして現代の黒人差別についてさらに考えてみたいと思う。

参考文献

田染早奈子『『ハックルベリイ・フィンの冒険』におけるハックの「良心」の分析』文学研究科篇、『佛教大学大学院紀要』第42号、2014年、19－33頁。

鈴木恵介『『ハックルベリイ・フィンの冒険』における黒人表象』神奈川大学大学院外国語学研究科、『神奈川大学大学院言語と文化論集22』、2016年、31－72頁。



高橋昌明 『定本 酒呑童子の誕生 もうひとつの日本文化』岩波現代文庫、2020年

日本文化学科1年 Yさんの読書レポート

著者の高橋昌明(神戸大学名誉教授)は、日本中世史を専門とし、平家物語や平清盛などをテーマにした日本中世史に関する本を複数著作している。そんな中でひとときわ異彩を放つのが『定本 酒呑童子の誕生 もうひとつの日本文化』である。

私が本書を選んだ理由は、「酒呑童子は都に疫病を流行らす鬼だった」という、普段の生活の中では考えもつかないことに目を引かれたからである。私たちの世代に全く関係がなさそうに見える「鬼」や「妖怪」であるが、意外にもその概念に触れることは多かった。その一因は、当時アニメとして放送されていた『妖怪ウォッチ』(2013、レベルファイブ)、『ゲゲゲの鬼太郎』(2018、水木しげる)にあるだろう。私たちの世代であれば、「酒呑童子」は魅力的なキャラクターとして記憶に残っている人が多いはずだ。そんな中で、酒呑童子の本来の姿を知る機会を得たのは幸運といえる。

本書のテーマはあくまで「酒呑童子」についてであるが、著者はそれを通して「中世社会の内と外」、「中心と周縁」、「境界や排除」などにも目を向けている。本書の立場は「疱瘡を流行らす疱瘡神を酒呑童子の現像とする」というところにあると著者も明言しており、それらを上記の内側と外側について関係させながら、酒呑童子伝説について追求していくものである。

第一章では、「酒呑童子の原像」をテーマに、一条戻橋や川、道路、祭事などから、当時考えられていた穢れを立ち入らせないためにおこった境界性について語られている。その際に出てくるのが、酒呑童子の住む山とされた大江山である。大江山は「鬼気」と呼ばれるケガレが下りてくる山、そして最終的に「鬼気」の侵入を防ぐ場所としても扱われた。防ぐために行われた祭事から、「鬼気」は霊的存在から、実体のある鬼とされるようになり、それが大江山の鬼、「酒呑童子」になったとしている。

第二章のテーマは「酒呑童子のふるさと」である。日本に根付いた猿や赤色という酒呑童子のイメージはどこから来たのか、ということである。著者はこれを中国由来として語っている。中国に残る『白猿伝』と『酒呑童子』の伝える内容が非常に類似している点がある。『白猿伝』に出てくる猩々、つまり猿というイメージはここから発生したと考えられる。そして、赤について関係してくるのがまた猿である。疱瘡に罹ると皮膚は赤く変色する。そして中国でゴリラは大猩々、オラウータンは赤猩々と呼ばれる。それ

が伝説の猩々と混濁されたことでこの赤と猿のイメージにたどり着いた可能性が高い。

第三章では、「竜宮城の酒呑童子」がテーマとなっており、水神と酒呑童子の関係性について書かれている。水界と地脈が存在し、それが竜宮城に通じていることから展開し、水場の妖怪河童が猿猴と呼ばれ、猩々との繋がりから、酒呑童子伝説に影響を与えている可能性が考えられる。また、水はケガレを流す場所とされ神聖なものであるという一面と、長雨や不快な湿潤は疫病を引き起こし祟り神とされる一面から、疫病の神と水神は繋がりがあるとされている。

第四章から第六章では酒呑童子の物語そのものについて書かれているものが多い。酒呑童子伝説の本にはさまざまな種類があり、本書で取り上げられているのは、大江山を舞台とするサントリー美術館が所蔵する『酒呑童子絵巻』(以下、サントリー本)である。これらの章では、大江山そのものについて考え、そのほかの鬼退治物語との類似性、舞台が伊吹山である酒呑童子物語を三つの神社から読み解くなど、その他の酒呑童子伝説とサントリー本との違いを挙げている。最終章では頼光の酒呑童子退治の冒険をほかの登場人物との関係性などから酒呑童子の最初の物語に近いものについて考え、ほかの資料よりも、サントリー本が近いとしている。

私は本書を読んで、大江山を舞台とするもの、伊吹山を舞台とするもの、様々な酒呑童子の物語が残っているながら、川や水と関係する話が少ないという印象を受けた。本書でも紹介されていたように、酒呑童子に関わりが深い猩々や猿猴も水場に住み、水神との関わりも深いのだが、酒呑童子が住んでいるのは山である。

ただ、大江山が全く水に関わりが無いと言われるそうではない。大江山を源にして二瀬川溪流と呼ばれる川も流れており、観光地としても知られている。そして、本書の第三章で語られた、水界と地脈、地脈を自然のエネルギーが通るような場所であることを考えると、川の水、そして山という自然は関連しており、この印象は間違いであったといえるだろう。

もう一つ、この視点から考えたいのは洞窟についてだ。サントリー本では酒呑童子は洞窟に屋敷を作り住んでいる。本書の本文には洞窟や岩穴を潜り抜ける行為を胎内ぐぐりに見立て、生と死を象徴すると考える部分がある。私はそれだけでなく、洞窟という場所が、水神が住む竜宮城のような役目になっているのではないかと考えた。基本的に湿度が高く、地下水や雨水が溜まることから水を連想し、それが媒介する疫病などから酒呑童子と結びつけたのではないだろうか。

私は、本書を読んで、普段考えなかった、物語や伝説の発祥や派生について考えるようになった。よく耳にする伝説にも、さまざまな派生やそれに関連した土地に残る伝説があり、疫病や災害など、形にはないものを基として作り上げられたものもあるのだと知るきっかけになった。本書で浦島太郎に出てくる竜宮城にも酒呑童子の伝説と関わりも紹介されており、このほかにも物語や伝説同士のかかわりがあれば調べてみたい。



リン・ハント、長谷川貴彦訳『なぜ歴史を学ぶのか』岩波書店 2019年

英米文化学科3年 Sさんの読書レポート

私が紹介する本は、リン・ハントの『なぜ歴史を学ぶのか』である。私がこの本を選んだきっかけはヨーロッパ史概論Ⅰのイントロダクションで、「歴史とはなにか」について学んだことにある。その講義を通して、歴史を学ぶ意義や歴史学を学ぶことの重要性・価値についてより詳細に学びたいと感じたため、私はこの本を読書レポート対象として選択した。本稿において、前半では要約を行い、後半では筆者の考えに対する自分の考えを述べ、なぜ歴史を学ぶかについての考察を行う。

歴史的真相を確定させることは、決定的に重要である。それがなければ、政治家の嘘に対抗することができないからである。歴史的真相は二層構造になっている。第一の段階では事実が問題となり、第二の段階では解釈が問題となっている。事実というものは、意味を与える解釈に組みこまなければ、動き出すものではない。そして解釈のもつ影響力は、事実の意味を与える力を基盤としている。

歴史的真相は、それが依拠する文書の性質によって決定される。歴史における影響力のある文書のいくつかは、捏造であることが証明されている。世界は山のような歴史的真相によって満たされているが、考慮するのは、ある特定の時点でのごくわずかな事実についてである。私たちが関心を持つ事実は、語りたい物語を可能にしてくれるものなのである。物語を語るということとは、私たちの関心を事実に向けるが、それによって論争を引き起こす。歴史家は、同じ出来事に対して異なる事実を強調することによって異なる物語を語っている。この不協和音は、あらゆる解釈に対して疑問を投げかける。

歴史家は常に個人史や社会的文脈によって規定される観点から歴史を記述しているので、その叙述が完全に客観的だと主張することはできない。歴史的真相に関するクヴィルの主張は、歴史家のあいだで広く容認されている共通規範を基盤としている。あらゆる解釈の真実性は、その首尾一貫性と重要な事実に対する解釈を提供できるかどうかにかかっている。首尾一貫した解釈とは、論理的なものである。それは適切な証拠を提示するもので、その証拠から非合理的な結論を導き出すものではない。

ある歴史解釈が本当の事実 に立脚し、論理的に首尾一貫し、

できるかぎり完全なものに整序されているときでさえ、その解釈の真実性は暫定的なものにとどまる。新たな事実が発見されることもあるし、完全性の指標も時代によって変化するからである。歴史家たちは、長らく卓越した国民のアイデンティティの語りを提供することによって、国民国家の一体性を支えてきた。そうした叙述を読むと、書かれた当時は気づかれなかった不完全性が明らかとなる。こうした愛国主義的な盲目作用は、世界のいたるところで発生している。しかし、過去の解釈に対する現在の優越性に自己満足する前に、やがて私たちの歴史が同じように不完全なものとして見えてくることを認識しなければならない。

この本を読んで私は、歴史学を学ぶことの重要性として批判的思考を培うことができるという点に着目した。一見したところ、歴史的真相というものは単純明快なものに見えるが、一見してわかるほど事実は単純でない。なぜなら、歴史というものは新たな文書、新たな物証、新たなデータというものが常に発見されており、確立した事実とされていたものが、いとも簡単に覆されるということもありうるからである。このように歴史を学ぶことで、歴史の固定化された事実をただ鵜呑みにするだけではなく、事実の評価や異なる視点の検討を通じて、批判的思考力を養うことができる。

歴史学を学ぶもう一つの重要性として、アイデンティティの形成が挙げられる。私たちの誰もが、家族、近隣関係、エスニシティ、性、地域など、歴史との関連でそれぞれ別々のアイデンティティを保持している。これらのアイデンティティは長い時間を経て形成されたものであり、歴史と密接に関連している。私は歴史を学ぶことは、自分たちの過去を理解し、個人および集団としてのアイデンティティを形成するのに役立つと考える。

また筆者は、「歴史は時間に関わるすべてを対象とする」と述べているが、私もこれに賛同する。身の回りのすべてのものは、その痕跡が容易に可視化される過去二、三世紀といった時代だけではなく、永遠の時間がつくりあげた堆積物なので、時間を経てできたものはすべて歴史と密接な関係があると感じた。このように、過去の出来事や動向が現在にどのような影響を及ぼしているかを理解することで、現代社会の問題や現象をより詳細に理解でき、これも歴史を学ぶ意義の一つなのではないかと感じられる。

歴史を学ぶことは、私たちの過去を理解し個人および集団としてのアイデンティティの形成に役立つ。また、歴史は単一の物語ではなく、多様な視点や解釈が存在する。したがって、歴史を学ぶ際に特定の事実や一面的な解釈だけを鵜呑みにするのではなく、批判的思考力を培うことが重要である。また歴史の学び方として、過去の出来事や動向が現在にどのような影響を及ぼしているかを理解することが大切である。歴史を学ぶことは、単に過去の出来事を学ぶことではなく、現在、そして未来を生きたためにこそ重要であることに、我々は改めて目を向ける必要があるだろう。